

稿本系『八雲御抄』の本文について

―筑波大学附属図書館蔵本巻六「用意部」翻刻―

寺島恒世

『八雲御抄』の諸本は、早く和田英松氏が「御初稿本」と「御再撰本」に分ける案を提唱され、『皇室御撰之研究』明治書院、昭和八年四月)、それを承けてなされた久曾神昇氏の詳細な考証により、その系統分類案が通説となり、今日に至っている。

両系統本のうち「御再撰本」の伝本は、本文異同が多く、関係も複雑で、久曾神氏説では、さらに二段階に下位分類され、多様な諸伝本が整理された(『校本八雲御抄とその研究』厚生閣、昭和一四年九月)。それらのうち近年、右の久曾神氏説で「前田家蔵伝 伏見天皇宸筆本」として紹介されていた鎌倉期古写本が、文化庁保管本(重要文化財)として出現し、片桐洋一氏監修・八雲御抄研究会編『八雲御抄 伝伏見院筆本』(和泉書院、二〇〇五年三月)において全文が翻刻された。また、やはり鎌倉期古写本であるハーバード大学美術館蔵伝後二条天皇筆本の巻五本文が、海野圭介氏により、藤波切との関わりを含め、詳細に説明され(「ハーバード大学美術館蔵伝後二条天皇筆『八雲御抄』について―藤波切本『八雲御抄』の伝存とその本文―」『国際シンポジウム 日本文学の創造物―書籍・写本・

絵巻―」人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇〇九年九月)、『八雲御抄』の本文は新たに検討し直されるべき時期を迎えている。

その「御再撰本」に対し、「御初稿本」に関しては伝本が乏しく、久曾神氏説では内閣文庫蔵本と東京帝国大学附属図書館旧蔵本のみが示され、しかも後者は震災で焼失し、校合本文のみから知られるという状況であった。その後、『日本歌学大系』別巻三(風間書房、昭和三九年五月)において、「御稿本」として志香須賀文庫蔵岸本由豆流旧蔵本が紹介され、巻二の本文が翻刻されたのは貴重であったが、稿本系本文の実態を窺うための資料が心許ない状態にあることは変わらない。そもそも従来もつばら依拠本文とされてきた内閣文庫本には、まま過誤が存し、後人の書き入れが本文化した可能性も指摘されていた(「(論考)国会図書館本と内閣文庫本の関係について」『八雲御抄の研究 正義部・作法部』和泉書院、二〇〇一年一〇月)。その一方で、内閣文庫本は、本文異同において、古写善本の伝伏見院筆本との高い「一致度」も指摘されており(『八雲御抄 伝伏見院筆本』解説)、その原態を捉えるためには、さらに別の本文との比較

・検討が望まれるところである。

先に大東急記念文庫蔵本の『八雲抄作法部』の解題（『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世篇 第四卷 和歌Ⅰ』汲古書院、二〇〇三年四月）で触れた通り、筑波大学附属図書館に蔵される一本は、その稿本系に属する伝本である。卷二のみ「御再撰本（御精撰本）」系統に属するものの、他の五巻は「御初稿本（御稿本）」系統の本文を有している。その書誌の詳細は別稿「八雲御抄の本文の改訂―筑波大学附属図書館蔵本の紹介を兼ねて―」（『かがみ』第四十四号、二〇一四年三月）に譲るが、書写年代は江戸時代初期頃（卷二のみ中期頃）と推定される写本である。

本稿は、稿本系本文の検討に資すべく、筑波大学附属図書館蔵本（ル二〇五／一三九）のうち、卷六「用意部」を翻刻するものである。

翻刻

凡例

- 一、本文は、仮名遣い・改行等を含め、すべて原文の通りに翻刻した。
- 一、清濁を分かち、私意により句読点を付した。
- 一、漢字の異体字は通行の字体に統一した。
- 一、部分的に文の切目等に付される朱点、固有名詞に付される朱線等は省略した。

一、後筆による読み仮名等の書き入れは省略した。

一、墨付丁数とその表・裏を示した（「オ」は表、「ウ」は裏）。

一、内閣文庫本との異同を示した。

本文

八雲抄第六

用意部

歌をよむ事は、心の発る所也。さらに人の教によらず。されば父堪能也といへ共、子かならずしも其心をつがず。師匠風骨あれ共、弟子又其体をうつす事なし。昔斉桓公が文をよむを聞て、車つくりが問て云、何事にか侍らん。桓公云、これはふみとて、古の人の作をきたる物也。車作ノ云、さてはせむなき物にこそ侍なれ。其詞ありといふとも、更に其人の心頭（「オ」）れがたし。只古人糟粕也。我車を作に、種々の故実おほし。其様心にみなうかべたれ共、をしふる詞なし。我七十に成といへども、いまだ子に是を伝ず。文も其定にこそ侍らめといへり。歌も又是におなじ。心はよきやうもわろき様もしれる輩も、人に教る力なし。されば、歌をこゝろふる事は、よむよりは大事也。其ふかき心をしらずして、ふかき心をよむ事かたかるべしといへども、一様に叶ておほせつれば、をのづからよき事もある共、凡の歌悉にかなはず。堪能の人たびごとくに（「ウ」）秀逸にあらず。さしもなき歌人も能歌はよめ共、すべての歌の様、更におなじ物にあらず。

歌をみしり、こゝろふる事、此道の至極也。たとへば、管絃は堪能と耳きく事とは各別なる也。歌もよくはよめ共、心をしらぬ人おほし。其様、管絃の耳にかはる所なし。管絃⁽¹⁾をせむとき、此みちに長ぜむ人をしへて、いかゞ此笛のこゑはしらみたる也、此琴、琵琶のをはゆるびたるぞ、と教るとも、其座にては、をのづからげにときく事あり共、座かはりて又次の日など、なを聞しるべきにあらず。管絃に長ぜむ^(二)（二才）人は、琴、笛のさがりあがり、いさゝかのたがひもあきらかに聞べし。すこしも管絃をまなばん人はふかく成といふ共、いづれのを、いづれのあなど聞ず共、なべものゝねのたがひたるやらんと聞べし。楽などのあらず成ゆかむは聞ゆべき事也。又つや／＼管絃のゆきかたしらざらむ人は、さ程だにもきくべからず。歌も又おなじ。道に長せん人はあきらかにみるべし。すこし是をしらんものは、さすがによしあし心にはおぼゆべし。つや／＼歌の行かたしらざらん人は、何共聞べからず。但、歌^(二ウ)はいかなる物も心ふる事なれば、我が心によしなど思ふ事もありもやすらめ共、それはたゞしらざるにおなじ。是を心得てしらむと思はゞ、此道をふかくすべし。歌はたゞせんずる處、深詞⁽³⁾によりて、其心を作るべし。いはゞよき詞もなし。わろき詞なし⁽⁴⁾。たゞつゞけがらにせんあくはある也。万葉集にあればとて、よしえやし、はしけやし、などいへる詞、よむべきにあらず。かのたぐひこれにかぎらずおほし。抑かの万葉集は、やすき事をかくして、かたき^(三オ)事をあらはせりと、通俊、後拾遺の序にいへり。但、俊成是を難ず。ゆへあるべきにや。たゞなう／＼などの様なる事もあり。又昔詞今の世に不知

もある也。其外昔より心なき物に心をあらせ、いはぬものに物をいはせ、あるべからざる事をたとへ、人の心をおこがましくなし、そらぼけをこのみ、そへ⁽⁷⁾ことゝす。昔の在納言は、春のきり霞⁽⁸⁾の衣、涙の玉、などよめり。中ごろ、ものいひかはせ秋の夜の月、心もゆきてかさなるを、など読り。其外、枕のしたに海はあれど、云、袖にみなとのさはぐ哉、大空におほふばかり^(三ウ)の袖、時鳥なく一声にあくるしのゝめ、空にや草の枕ゆふらん、などいへるたぐひおほかるべし。しかるを、或はかくのごとき詞うけられずなどいふ人もあり。京極関白の歌合のとき、俊頼が、雲の衣をぬぎすてゝ、とよめるをば、康資王母なでうさる事のあらんぞ、となむず、是なり。父の経信が、紅の桜をなんずるやうなり。近比もさやうの詞をば、おそろし、いかゞさることあらん、まことしからず、などいふ人もあり。たゞ、ことにより、おりに随ふ事也。すつべからず、このむべからず。かゝればとて、思かけぬ事^(四オ)をいひて、それをためしに引べきにあらず。寂蓮法師がいひけるは、歌のやうにいみじき物なし、ゐのしゝなどいふおそろしき物も、ふすゐの床などいひつれば、やさしき也、などいふ。ましてやさしきものをおそろしげにいひなす、むげの事也。あべのきよゆきが式云、凡和歌者先花俊実、不詠¹古歌并卑陋所名歌異名ヲたゞ花の中に花をもとめ、玉の中に玉をさぐるべし、といへり。隆縁が、おほそ鳥、といひ、道経が、ねずひさに、といひて、いみやうにつくも、ともにおそるべし。名所なども聞にくからんは、ことに^(四ウ)おもふべし。花にはいくたびもよしの、紅葉には龍田、月にはさらしな、をばすてにてたりぬべし。俊成がかける物に云、大かた歌はかならずしもをおか

しきふしをいひ、ことの理をいひきらんとせざれ共、本より詠歌をとて、⁽¹⁰⁾

たゞよみあげたるにも、うちながめたるにも、何となくえむにもいうげむにもきこゆる事のあるなるべし、よき歌に成ぬれば、其詞姿の外に、景氣のそひたる様な事のあるにや、たとへば、春の花のあたりに霞のたなびき、秋の月の前に鹿の声をきき、かきねの梅に春風の匂ひ、峯の紅（五才）葉に時雨のうちそゞきなどするやうなる事の、うかびてそへる也、つねに申様侍れど、かの、月やあらぬ春や昔の、といひ、むすぶ手のしづくににぐる、などいへる也、なにとなくめでたく聞ゆる也、か様な姿詞によみ似せむと思へる歌は、ちかき世にはありがたき事なるを、此ほど見侍る御百首などもそこそ、まことにありがたきことゝはみえ侍れ、すべて此道は、いみじくいはんと思、ふるき物をもみつゝさむとするにも更によらざるべし、かつはたゞ前世の契りなるべし、すべて詩歌の道も、大聖文殊の御智恵より発れ（五ウ）る事也、といへり。まことにたゞむねのうちを出ざる風せい、人のをしへによるべからず。一切の芸は、よき師匠に逢て学ぶにむなしき事なし。此歌の道にきては、たゞ心のいたるといいたらざると也。後白川院の梁塵秘抄といふものに、いま様の上手の様をかゝせ給へる中に、歌よむ輩も、万葉集の様などいひて、くせみよめ共、まことによき歌よみに成ぬれば、やす／＼とありのまゝの事とこそ聞ゆれ、何事も長じぬればかくのごとし、といへり。誠によく／＼幽玄をむねとしてよむべき事也。但、近代あまりにやさばまんと（六才）しすぐして、心もなき歌おほし。それは又、平懐のみぐるしき物にもいとまさらずや。すべて歌にきはめてうけられぬ事のある也。よりて六のやうをたてゝ、これに

のす。

第一にちかき人の歌の詞をぬすみとる事

此事、歌人のきはめていたむところ也。ふるき事を准し、あたらしき詞を思えていひはてたる事を、かれがうらやましきまゝに、やす／＼とわろくとりなしていひつれば、もとの歌の詞もみ／＼なれず、今の歌もむげにけきたなく、後代にはいづれかさきなりけむ、勘知ざらんには、たゞたれも（六ウ）よみける事にてあらん。極たる大事也。さればとて、春霞龍田の山、久かたの月のかつらの、など云様なることばは、二句つゞきたり共はゞかるべからず。二文字成共、あたらしき事をとるがあしき也。万葉已下ふるき事も基として、二三句もわざとかへてよめるたぐひはあれど、それは別の事也。雅経が、なくねも夜はの、とよみたりしをば、家隆が、露のぬき夜はの山風、とよみたるに似たりと、定家難じ申き。一文字二文字と云共、み／＼に立やうなる事をとるがあしき也。雅経はよき歌人（七才）にてありしを、後京極摂政の、人の歌をとる、といはれけるときゝしを、さしもやと思ひしに、建曆の歌合の時、有家が、すゑの松山ずことゝ、とよみたりしを、評定るとき、定家、雅経などしきりに堪じ申しを、同年七月に五首の会のありしに、足引のやまず心にかゝりても、とやがてよみたりしは、いかなる事にか。雅経、さしも有家をうらやましく思ふべき程の歌よみにてもなきにだにかゝり。まして已下の人、われも／＼とをとらずとる、是第一のとが也。但、老ぼれぬるものゝ、をろ／＼（七ウ）きゝたる歌などを、我あたらしくよみいだしたると思ひてよむ事おほし。隆信朝臣など、つねに此事あり。これは難にはあらね共、物わすれせむもの

は、ことに歌をよみては人にも見せ、よくくさたすべき也。

第二にあらぬ様なる秀句をこのむ事

あらぬやうの秀句と云は、たとへば、池にすむをし明がたの空の月、といふ歌侍き。それは、池にすむ明方の空の月、といひたり共くるしかるまじきに、池にすむをし、といひたれば、かつはふかき心もありてよき儀也。しかるを、あさ(八才)衣うつゝ、など申事侍き。上手の中にだにかく侍り。まして、さるほどの歌よみ、われもくとはげみこのむ事也。もずのあるはじめて秋たちえ、などいふ体の詞、たくみにはあらで、をかしくこそ聞ゆれ。山鳥のをのしだり柳、さやけき月のかけまく、月のかづらき山、衣を宇治のはし姫、など云様の事、此程かずをしらず。此事一句にあしともあらず。ふかくも文字のしやうにたがひ、又そのものにあらぬ物を、かくのごときにつゞけてよめるたぐひはおほかれど、それも様によりて、よくもあしくもきこ(八ウ)ゆるなり。抑柿本人丸が、ほのくとかあかしの浦、久堅のあまぎる雪、なき名のみたつの市、などよみてよりこのかた、行平中納言が、立別いなばの山、といひ、壬生忠岑が、君が代に会坂山、とよめるたぐひは、いにしへもいまもおほかれど、体ことなるべし。凡万葉に、春草をまくひの山、などいへる風情は数しらず。吹や嵐の、たつや霞の、などいへる事をこのみあへり。是かならずしもいみじとも聞えず。ゆふづく日さすやをかね、など云ふるき事も、さのみ耳なれぬればよしとも(九才)きこえず。思ふか物を、はるゝか雲の、さやけき月のかけまく、月のかづらき山、衣を宇治の橋姫、など云やうの事、此程数しらず。これはあらぬさまの秀句にてはなき也。たゞふつと事たがひたるこ

とをあしく引よするが、おほきなる難にてある也。

第三に詞の入ほが

こと葉の入ほがは、たとへば、霧のあり明、風の夕暮、露かけて、雲たけて、など風情也。これ程こそあらず共、二たびいづべきにあらず。まして消なむ露の夕暮、と云(九ウ)歌侍き。それは、露といひたるも、夕暮といひたるも、ことかなひたるうへに、さほどとて入たる人の一首などこそ侍るを、其後、よろづの人、此様をあしさまにとりなす、尤みぐるしき事也。この程歌を上手びてきかせむゆへに、吹やあらし、たつや霞、などいへる事をこのみあへり。是かならずしもいみじとはきこえず。夕付日さすや岡べ、など云ふるきことも、さのみになれば、よしとも聞えず。思ふか物を、はるゝか雲の、などこのむ、尤よしなし。なにをとばかりに、など体の事おほし。ふるき歌(一〇才)にもあれど、今か、月か、花か、などふるまふよしなること、つねにこのみよむべからず。さのみか様の事をいへば、せばき様なれば、めづらしかりし程は面白けれど、あまりになれぬれば、よしなき詞どもおほし。聞ねたゞ、暮ねたゞ、などいひ、ちかき世にはまた、かけてながら、をのれさぞ、など云事、人ことの詞也。是もあまりになりぬれば、耳なれぬべし。よくくはからふべき也。定家の云、しろき、あをき、吹く風哉、あらし吹也、にてのみ侍、といふや、詞のわるきにはあらじ、あまりに人のこのむをにくむ也。やすく、谷川の水、といふべ(一〇ウ)きを、谷川の水、とよみ、木枯の風、にてありぬべきを、木がらしの声、など云事、尤無曲いりほがといふべし。

第四に風情のいりほが

是は余めづらしき事をよまむとする程に、をかしき事共おほくきこゆ。梢によするあまの釣舟、と詠るは、げにも松の葉、こしには、さこそみゆらめとおぼゆ。しかるを、舟より月いだし、などする事は、あまりの事にや。あるものゝ歌に、をみなへしを露のをきたるをよむとて、花にはき玉葉にはあを玉、とかやよみたるとて、ふしぎなる「(一一才)事にかたる人侍き。風情のやう、よにきたなくこそ聞え侍れ。これ程こそなけれども、か様の事おほし。又あまが海の底に入て月みるらんと云心を、入てもあまは月やみるらん、とよみたりしもの侍き。か様の事は、いりほがまではなれ共、たゞ其道にむげにたへぬところのをしへ事也。雲間行かたはれ月のかたはれはおちても水にありける物を、これぞ風情のいりほが第一といふべき。凡あまりに風情をもとめてよめば、きときく人さもとおもはず。よく／＼それを思慮すべし。(一一ウ)

第五に心えさせぬ事

たとへば、上手の歌のふるき心あるを、え心得ぬまゝに、上手にもえ心得させぬ歌をよみて、我も心得ぬ事おほし。万葉、古今よりこのかた、ふかき心の歌心得がたきはおほかれど、それはなぞ／＼など体によめるもあり。わざと心をふかくよめるもあり。本説などあることは、心ふかきやうなれど、其体にはあらず、たゞものをいひさし、かけり、たくみすぎて心えぬなり。さなめりとはみゆれど、いひおほせぬ事おほし。さ様の歌は、たゞよは／＼と平懐なるにははるかにおとりて、(一二才) 見ぐるしく聞ゆ。凡歌人のやう／＼おほければ、いづれをそしり、いづれをほむべきにあらず。せむずるところ、つゞけがらにてあれど、一すぢにやさしきをこのみ、

詞をかざるほどに、かやうの心得ぬ事おほし。たゞ心いたらざらん人は、よは／＼と平懐によむは、いとをしきかたもあるべし。

第六にいくいけをこのむ事

是は六の中にいたくあしき事にてはなし。上手の中にもおほかる事也。歌よむべき様、よく／＼さとりたるも「(一二ウ)のゝ、すこしそのこつなきは、おほくしかるべき歌人のなかにもあり。大方歌のすがたにて、にくいけもよきやうにてあれど、いたく秀句などをする程に、あしざまなる事あり。ひまこそなけれあしはやへぶき、とよめるは、風情もめづらしく、ことばすがたもやさしく侍り。公任卿なのめならずほむる歌也。しかるを、こや共人を、といへるが、などやらんにくいけして聞ゆる也。歌にもかゝり、ましてわるきにくいけは、よにあしき事にてある也。しらいと、といひては、うちはへて、くる、よる、などまではき「(一三才)る事にて、あまりに入たちて、みづのわくにぞ、などいふ事も、あながちによし共聞えず。おほかたは秀句は歌のみなもと、これをせむとする事なれど、あまりにくさりつゞけよめば、一定にくいけがそふ也。あるものが歌に、へおしからぬみ山をろしのさむしろになど⁽¹⁹⁾のちのいくよ独ね、とよみたりける。此文字くさり、返々おかし。さまあしくこそ侍れ。これほどこそなけれど、かやうの事少々みえ侍。其中にも、よくつゞけたるはよく侍れど、これをせむにて、みぐるしきもおほく「(一三ウ)侍にや。此六の難、かくはいへ共、これをはなるべき⁽²⁰⁾あらず。大方歌を讀ことは、家々の抄物にをしへたりといへども、事と心とわきがたきゆへに、是を知事かたし。歌をよむがかたきにあらず、よくよむがかたき也。せむずるところ、心をつ

よくて、えんに聞え、風情をもとめて直なるべき也。俊頼抄云、心をさきとして、ふしをもとめ、詞をかざりよむべき也、心あれども詞かざらねば、歌おもてめでたし共聞えず、詞かざりたれ共、させるふしもなければ、よしとも聞えず、めでたき「(一四才) ふしもなければ、よしとも聞えず、めでたきふしあれ共、幽なる心詞なきは、又わろし、けだかくおもしろきを一の事とすべし、といへり。誠にしかるべき事也。大かたはいづれも事により、様によるべし。かならず、唐衣といひたれば、龍田の山といはではいかになど思、あづさ弓といひては、よるといふ事をすへむとして、雲、霧には、たつとつゞけむともむる事、しかるべき事なれど、かならず又このむべからず。なでしこをば、とこ夏といひ、猿をましらといはむとこのむ事、尤此道をしらぬ人の所為也。つるは、あしたづ「(一四ウ)といふこそ、あしづるとはいはねば、ちからなけれ、たゞ、つるといはんをわろがりて、たづなどこのむ事、返々見ぐるし。凡歌の子細をふかくしらんには、万葉に過たる物あるべからず。歌の様をひろく心えんには、古今第一也。詞に付てふしんをひく⁽²³⁾かたは、源氏の物語に過たるはなし。其道をふかくして、むなしき事なし。たゞよく／＼ふかくし学して、さるものから、しりがほに、ふるきうけられぬ詞をこのみよむべからず。一切芸は学せずして、其能をあらはす事なし。たゞ歌計こそ、させる物みぬ人も読事にては「(一五才) 侍れど、それは猶始終まことすくなき事おほし。すべて歌をよむに、おもふべき事又六あり。

第一に風情をさきとすべき事

風雲草木の、時に付てかはる姿を思ひて、風情をもとめよむ事は、誰も同

事なれど、心のいたるといたらざると也。さきにも云がごとく、あまりに入たちて、きときく人の、さもと思はぬ風情は、思やりたる風情にはおとるなり。ふるき歌の風情をとる事は、詞をとるにはおとるべし。たとへば風情をとることあり共、ことばをかへて、こと「(一五ウ)ものなどにてよむべし。

第二に心をさきとすべき事

心をさきとすると云は、あまり詞をやさしからむとするほどに、つや／＼心なき歌を近代おほくよむ也。此比の歌の難、首也⁽²⁴⁾。中比の歌のわるしと云は、心をさきとして、詞をかざらざる故也。上古の歌のいみじきと云は、両方を兼たる故也。但、歌にころあるやうなる人のまだしきは、おほく心はなく、ことばをむねとする也。只平懐なりと云とも、心をすて、かけりよむ事なけれ。たゞ歌と云物は、「(一六才) 心をもと、すべき也。歌の行ゑもしらぬものゝ、なまさかしく歌よむよしなどするは、つや／＼心なけれ共、野辺は露には涙の、など云を面白がる事、尤をろかなりとす。

第三に詞をさきとすべき事

詞をさきとすといへるは、心を後にせよと云にはあらず。心あれど詞の聞くきはわろければ也。やさしきこと葉と云は、たゞさしたるふしなき歌も、それをせむにてありぬべしとみゆるもあり。よはき詞、だびたる詞、返々みぐるしき事也。それをよまじとすれば、又心たしか「(一六ウ)ならず。中比と此比とかはりたりといふは、たとへば、池水は天河にやかよふらん空なる月のそこにみゆれば、是此ごろの人ならば、見ゆれば、とはよむべからず。うつれる、とぞよまゝし。それは心ことの外たがふ也。

みゆれば、と云てこそ、かよふらん、のせむはあり共、今の世には、それをばふかくも思はで、たゞきくくければ、うつれる、とよみて、すこし聞にくき様を好べき也。是も近代の心なれば、かくおぼゆるため也。みゆるは、とはてたる、又一すぢにわろしとすべからず。へ明ぬるか河せの霧のたえぐにをちかた人の袖の見ゆるは、「(一七才)是又近代の人ならば、袖ぞみえゆく、とぞよままし。それはよにかたはらいたく聞えなまし。此歌のす多に、みゆるは、相応せり。されば同詞のよくもあしくも聞ゆるが、上下の様にしたがふと云事、こゝにみえたり。忠命法師が、煙たえ雪ふりしける鳥べ野、といへるを、公任卿きゝて、薪つきて、といはゞやといひけるにも、詞一にて、眼の有なしはあるなり。歌のすこしいひおほせぬ様なるは、更にくるしからず、だびたるがあしき也。けふのあはれは明日の我身を、といひたり歌は、上下たらぬ様なれ共、わろくも聞えず。抑「(一七ウ)又、いたづらことばをよむ事は力なく、中に詞のたらぬはさる事に、わざと、山の山鳥、山の山人、など好よむも、ふるき事なれど、いたくよきこと葉とも聞えず。ましてせんなき詞おほし。やすめ詞とかや云人のありし也。しかれ共、其やすめ詞なくてありなんとこそおぼゆれ。たとへば、なかぬ夜もなく夜もさらに郭公、の更の字、公任卿是を難ず。経信卿もおなじく是を難ず。此更の字は、すゑの、いやはねらるゝ、と云に、少かなひたる事もあり。つやぐせんもなき文字共よむ事もおほかる也。」

(一八才)

第四に古歌をとる事

是第一の大事、上手ことに見る也。⁽²⁶⁾しかあれ共、又いと上手ならぬ人も、

古歌よく取人もあり。上手の中にも、えとらぬもあり。是に二の様あり。一には詞をとりて心をかへ、一には心ながら取て物をかへたるもあり。詞をとりて風情をかへたるはよし。風情をとる事は、尤みぐるし。心をとりにて物をかふとは、たとへば古今の歌に、月よゝしよゝしと人に告やらば、とよめるは、万葉に、へ我宿に梅さきたりと告やらばこてふにたりちりぬともよし、「(一八ウ)といへるをとれり。是は心も詞もかへずして、梅を月にかへたるばかり也。かゝるたぐひこれにかぎらず。詞をとりて心をかへたるは、又おほし。万葉集歌などをば、本歌取やうとしもなく、すこしかへてよめるもおほし。へ人ごとは夏の草のしげく共いもとわれとしたづきはりなば、と云歌をとりて、ことは夏のしげくとも、とよめり。へ足引の山橋の色に出てわが恋しなんをせんかたなし、と云を、山たちばなの色にいづ、などゝれり。めかり塩焼いとまなみつげのをぐしもとりてだにみず、と「(一九才)いへるを、なだの塩やきいとまなみ、とゝれり。へすまのあまのしほやきぎぬの藤衣まどをにしあればいまだきなれず。これを、しほやくあまの藤衣、とはさながら歌をとるやうとしもなくとれり。又、しづくににごる山の井の、といへるは、人丸が、へむすぶての石間をせばみおく山のいはがきし水あかずもある哉、と云歌をとれり。しかのみならず、みわ山をしかもかくすか、行水にかずかく、みなせ川ありて行水、ことにいでゝいはぬ、などいへる、みな万葉のふるき詞をとれり。古歌に、衣にだになかにありし、といへるを、後撰「(一九ウ)歌に、つらからぬ中にあるこそうしといへれ、ととれるたぐひ、数をしらす。上古はかくのごとし。中比は歌とる事まれ也。近代は又おほし。其中にも、わざとめか

しく耳にたちて、是をとりたる計をせんにて、我心も詞もなき、返々此道の魔也。尤好べからず。近代、俊頼が歌をばやうく／＼とる事になりたるにや。それも猶ちかき歌をとるに似たり。歌をとらむには、猶ふるき歌を取べきなり。東三条左大臣の、おりてかさむ老かくるや、といへる、躬恒が、老もかくれぬこの春は、とよめる、すこしちかき世のた「(二〇才)めしなり。朝忠が、声なかりせば雪消ぬ、とよめるは、谷より出る声なくは、といへるを、さながらとれり。されど、是は歌をとる作法にはあらず、自然にかよへる也。凡ふるき歌をとる事、歌にまめなる人の所為、誠に一のことなれど、珍敷よみたらんには、猶おとるべくや。すべて末代の人、今は歌のことばもよみつくし、さのみあたらしくよき事はありがたければ、只よは／＼とある歌は、万の人にかはりたる所もなき事を、上手のけぢめあらんとて、おそろしき万葉集のことば、古歌とりなどして、まへを「(二〇ウ)はらふは、かならずよくよめりとはおもはね共、すこしけぢめあらんとするなめり。二句などいかにせん。三句とること尤不可然。凡古歌の詞いたくとるを、せん達難事也。⁽²⁷⁾

第五にてにをはと云事

是はよくあしくと思ふべきにもあらず。あしくてはかなはぬ事なれば、⁽²⁸⁾てにをはのすこしたがひたるよりは、それをあはせむとだびて聞えたるは、まさりてわろし。されば、てにをはのさしあひたる事は、たゞさてこそあらめ。清輔「(二一才)が、浦吹かぜに霧晴て八十島かけて、といへる歌は、もじ指合たれど、あしくも聞えず。此類これにかぎらずおほし。我身も草にをかぬばかりぞ、といへる歌は、いとしもなき人は、をかぬ斗を、

などいふにや。それは又てにをはの様をしらざる也。大かた五音と云物かよひぬれば、いづれもあたりてくるしからずといへども、又それもあしくいひつればみぐるし。たゞ歌よみならざるは、かくのごときの事也。たゞおなじことの、一文字にてよくも聞え、あしくなる也。又つゞけやうのあしきさまにて、文字うつりの「(二二ウ)耳にたつ事おほし。かはかのひじりがすゝめるといひけむやうに、ちかくも、月やどれとてやは袖の、などいへる文字つゞき侍り。これらほどこそなけれ共、ひとつものゝ名を、ふたつにひきゝりてつゞくることは、上手のふつとせぬこと也。滝のいとみまほしけれど、などもうけられず。又病の事は、他の巻にくはしくしるせり。一文字の詞の字も、はゞかりならへるもあり。あへぬ、しらぬ、などいへるぬの字は、はゞからずといへども尤可憚。文字の体あれば也。「(二二才)昔せし、いかに契し、などいひ、うかりしまゝに、成もしなまし、同都にありしかば、こゝちやはせし、などいへるし文字ははゞからず。此類おほし。凡集などに、昔はさうにをよばず、ちかき代の歌も病のあるはおほし。それをさらんとあしくはよみなすべからず。よく云よりなば、病をいたむ事なかれ。かくいへ共、ゑせ歌の病さへあらむは又わろし。

第六によく／＼思惟すべき事

左右なくよみたるまゝにては、をのづからくやしきこと「(二三ウ)もありて、後悔の病と云も、八病の其一也。能々思惟すべき事也。但、やすくよまむを、すぐろにあずべきにあらず。たゞそれも、人の心によるべし。もとよりよみたる歌よりは、はるかにおとりたるも、よみ出したる時は、よき様におぼゆるを、又次の日などみるにこそみざめはずめれ。すこしは

案ずべき事也。俊頼抄云、心とくめぐる人は、なか／＼久しう思へばあしうよまるゝ也、心をそくよみいだす人、すみやかによまむとするもかなはず、又かならずわろき事有、たゞ「(二三才)もとの心ばへにしたがひてよみいだすべきなり、といへり。まことにをそくよまれむを、とくよめとをしふべきにあらず。たゞとくよまれむを、猶あむせよと也。同抄に、賈之は一首を十日廿日によみける、といへり。それもたとへばの事にや。賈之毎度十日廿日に詠にはあらじ。たゞそれも歌を案ずるが能事を云也。賈之が秀歌とてある歌のやがてよみたる、集共におほし。たゞあまりみちをふかくすべき様を教る也。ちかくも、保季、行能など体の歌人は、「(二三ウ)当座も兼日も、たゞ同事也。げにも家にあて、ひぐらしあひすともかなはざらん事は力なし。たゞ人により事によるべき事にてあるが、嘉応、菩提院入道、宇治にて、河水久澄と云事をよませ侍けるに、皆人歌をきて後、良久まちけれども、清輔一人歌をいださず。いかに／＼といひけれども、あまりに久なりければ、さりとはとて、さうながら取出したりけるに、いくよになりぬ水のみなみ、とはよめる也。それも案じわづらへばこそひさしかりけめ。よき程にていだしたらましかば、何のせんかあらん。」(二四才)能々心うべき事也。かく秀歌にてをそければこそ、をそきもいみじきためしにはいへ、みぐるしき歌ならましかば、何をかせむに。せんずる所、何事もといひながら、歌はたゞ心より外の事なき物也。か様に心得て、能々思ふべし。我恋は、といひて、その末に其心とをらず、あはれ也、といひて、そのすゑにつや／＼哀なる事もなき歌おほし。すべて歌には、心得てよむべきの事のあるなり。いかなれば、おぼつかなく、といふ

五文字は、げにもおぼつかなき事をいひたるはよし。それがいともとをらぬ「(二四ウ)は、ゆゝしくみぐるしき也。又よくも聞えぬ詞おほし。さもこそは、物さびしかる、物わびしかる、思ふかな、物ゆへに、物にぞありける、あると思へば、いはまほしき、せまほしき、なになり、などいへる詞いともしもなし。又、あらましを、してし哉、みてし、など云事はつねの事なれど、などやらむにくし。きくはまことか、あらんとすらん、なども又にくし。おもほゆる哉、心ちこそすれ、などはなか／＼きやうじたるかたもありぬべし。又下句に、なに／＼有明、⁽³²⁾といひはて、なにを松風ぞ吹、などいへる、めづらしからぬ秀句は、「(二五才)むげのゑせ歌よみが好事也。俊頼抄にいへる詞の中に、わびしかりけり、かなしかりけり、べら、などはまことにさもと聞ゆ。かも、みわたせば、まに／＼、などは、⁽³³⁾かはあながちにくるしからん。凡いづれの詞もつゞけがらによる也。よき詞、わるき詞とさだめいへる事なかれ。歌をよむ事は、いふかひなくまだしきほどは、きはめて大事也。すこししりぬればやすし。猶やう／＼さとりいれば、又大事になるといへり。如此四五度もなりしづまると云るは、是も人ごとの事にはあらじ。人の心によるべきにや。」(二五ウ)やすくよむよしして、当座の百首、五十首、いくかにかなむ百首をよみたるなどいふ事、返々好べからず。選歌の道あさくなる事也。尤高名にあらず。百首なども、あまりにやすく人ごとによむ事、あるべからず。当座などには、一首二首おほからん定、三首にすぐる事なかれ。おほくよみて尤せんなき事也。抑さきにしるせるがごとく、此ごろねこじたるいりほがのおほく侍る、第一の難也。其中にも、よくいひつればあしくも聞えず。あしくいひ

つればいよ／＼みぐるし。やさしく」(二六オ)よまむ、おもしろくよまむとする故に、おほくはかくある也。よにも此道にたへたる人はあれど、このふりちからなき事也。是、一人がするところにあらず。ふかきあさきこそあれ、たれも是をはなるゝ事ありがたし。後拾遺、金葉集の比より後さまの歌、おほく平懐なる体なれど、ぬけてよき歌は又おほし。今も又うけられぬふしはあれ共、よきは又なべての事也。されば、中比にもすぎ、いにしへにもおよぶべき道は歌也。しかあれば、西行が夢にも、何のわざ」(二六ウ)もとろへ行に、たゞ此道斗、末代にたゆべからずとみえたり、といへり。しかるを、この道にむげにたへぬ人は、此比様とて、一向にそしる也。それは上古の歌の体をしらざるがいたすところ也。題を得て歌をあんずる事は、題にむかはではいひにくし。第一のよきさまは、たゞすぐにえんなるべき也。しかるを、此体心にまかせて云がたき故に、心こもりてえんなる、第二也。えむならんとすれば、かならず心たらず。心すぐならんとすれば、又えんならざる也。たゞえむならずといふ共、心をたしかに」(二七オ)よむべし。返々やさしさをこのむべからず。いとも此道をしらぬ人は、やさしくて心なき歌をこのむ也。天性堪能ならん人は、えんならんと思はず共、其色にぐすべし。させる事なき事をよくいひつゞけ、めづらしからぬ事をも、あたらしくいひなすべき也。昔よりよみきたれる詞、いづれかいはづめづらしかるべき。たゞいひなしがらによりてめづらしき也。上句くだけたらば、下句はかまへてすぐに、下句ことがましくは、上をすぐによむべし。上下共にすぐなるは本也。上下ともにくだけたる」(二七ウ)は、いまだ秀歌にこれをきかず。態やさしばまむとする事、せ

いをはなれてこれをこのみもとむれば、尤みぐるし。歌はやさしきをもて本とする事なれど、たゞをのれが心による事なれば、やさしく好よまむにも、このまさらんにもよるべからず。あまりに詞をやさばみて、むすぼれつゝにてのみあるも、返々みざめする事おほし。是歌道ひとつにかぎらず。管絃、音曲なども、面白からんとこしらへ、ちづめかせば、かならずき／＼にくし。たゞつよくたゞしくする事の劫入ぬればおもしろき」(二八オ)様に、歌も心を本として、其上詞をもとむれば、自然にやさしき事もある也。返々まだしき歌よみなど、是をこのむ事なかれ。又たけをたからんとて、文字をあまる事好人おほし。是も返々みぐるしき也。³⁶是は西行などがいひたきま／＼にいひたるをまねてあしく取なすなり。せんずるところ、三十一字つらぬるは、きはめて力いらす、やすけれど、古今の序に云がごとく、野べにおふるかつらのはひひろ／＼、林にしげき木の葉のごとくにおほかれど、歌とのみ思ひてそのさましらぬなる」(二八ウ)べし。此詞まことに末代のりうにいよ／＼かなへり。歌をみるに、心たがひ、くせあるはさる事にて、いはゞいひどころもなく、わるきこそおほかめれ。顕昭法師、寂蓮法師、ふぜいはむげにならびがたく侍れど、稽古やさしく侍けん、しきりに歌をあらそひけるに、寂蓮がいはく、さらば寂蓮がよみ侍様なる歌を、顕昭つかまつりてかくはよみつべし、されど、それがあしければ、顕昭がよみ侍様にはよむ也、と申侍らば、寂蓮閉口すべし、顕昭がよみ侍様なる歌は、寂蓮がよみそんじたる歌には」(二九オ)甚おほし、といひけり。げにもそのこつむげにおとれるうへは、云どころなし。すべて歌人のやう、人皆心に好々にて、いづれをさきとさだめん事かたし。但、

古今作者をしづかにみるに、上古まことに中興とみえたり。中比はすこし歌のみち浅薄なり。近比は昔にも及てや侍けん。定家云、歌の道はあとなきことくなりしを、西行と申ものよくよみなして、今に其風ある也、といへり。西行は、誠此道の権者也。其後、近比まで歌人昔にも及、中古にもこえてや侍けん。」(二九ウ)古今以往は、万葉作者おほけれど、家持、人丸、赤人など棟梁とせり。其後、野相公、在納言など、此道にたへたる卿相也。其外、遍照、素性、小野、伊勢、業平、貫之、躬恒、忠岑、まことに此道聖也。此外も、古今の比の作者、かれらが風をまなびけるにや、皆其骨にたへたり。然を、其後次第におとろふる様、代々集にみえたり。梨壺の五人めでたしといへども、かの古今の四人の撰者に及べからず。能宣、元輔は、為重代之上、尤可然歌人也。順、又重代にあらすといへ共、此道稽古」(三〇オ)者也。望城、時文は、たゞ父が子といふ斗也。其後、兼盛、重之、好忠など、昔のあとをつぎてことなる歌よみ也。彼輩が後は、只公任卿一人天下無双、万人これにおもむく。又、道信、実方、長能、道濟などを歌人とす。女歌には、赤染衛門、紫式部、和泉式部、上古にはぢぬ歌人也。其外に、道綱母、馬内侍やうの歌人おほく侍しも、みなうせ侍後は、天下に歌人なきがごとし。我もくとおもひたる人はおほかれど、上古にもさしてきたある事なし。公任卿無二無三の人にてある斗也。それ」(三〇ウ)もこもりにし後は、いよくいふかぎりなし。六人がたうとて、其比のしりけるは、範永、棟仲、兼長、経衡、頼家、頼実、これは範永が外は、歌よみともみえず。上下つや／＼歌よみと云物跡をつげり。然間、堀川右大臣、公任の跡をつぎて、我ひとりと思へり。公任もいにしへのた

めしにはいかゞなれど、為方⁽³⁹⁾万長をおほく、この右府のしる歌は、みな凡俗のさかいにのぞめり。こひうらなき、かほには袖を、むら／＼にみゆる、風情也。をのづからこのむ物も、此流をのみならひて、かしらさし」(三一オ)いだす人なし。延喜の比の中興、次第にをとろへて、こゝにつどめりとみえたり。定頼卿、父の跡をつげりといへ共、明善も堪能も及がたし。能因法師と云もの、身幽玄をこのみて、歌よみのよしふるまへど、それも花山の跡をよびがたし。女房の中に歌人おほかるころなれど、後一条院の比の五六人の輩にはしたてゝ及べからず。然に、経信卿計こそ、楚国に屈原がありけるやうに、独古体を存してならびなかりしかど、天下に是をよしとさだむる人もなし。白川院、後拾遺撰せられ」(三一ウ)し時、経信卿をおきながら、通俊これをうけたまはる。是末代の不審也。しかれども、此ことある事也。彼集は天気よりおこらず、通俊是を申をこなへり。かの通俊、わが歌をならびなき事と思へり。しかれ共、頼宗はにくいけ也。思ふ事をばいひとをせり。通俊は猶其上、口きかぬ。匡房はことなる上手にであるを、通俊むかひざまにはく、貴殿は詩賦に長じ給へり、何ぞしらぬ道に入て、歌を好給、といへり。匡房がいはく、今よりこそ此道とぞめ侍らめ、といふ時に、経信が云、詩賦によるべからず、」(三二オ)野宰相、在納言はともにこそ侍れ、といひけり。是をきくに、更／＼に心ふる跡なし。何事もたゞ当時の明善と後代の明善とはかはりける事にや。通俊、匡房は、賢臣真ぞならびて侍れれど、歌の道は同日の論にあらず、匡房はまされり。然ば、さ様に向さまに云けるに、匡房も理に折ける、いかなる事にか。されど、高陽院歌合の時、通俊が歌に、しるきはこしのたかね、あ

まのこやねの尊、とよめるをば、こしの高ね、むげにひやうかひなり、あまのこやね、おそろし、と難ず。げにも云所、其「(三二ウ) 謂あり。たゞ経信一人、天下の判者にてならびなし。其外は、匡房、俊頼など斗也。さらでは明譽も堪能もその人なし。行尊僧正とき、つけたる金玉はあれども、打はへ此道をむねとする事なし。公実、国信、顕季、顕輔、女には周防、肥後、康資母などいふ体の歌人あれ共、昔にも及がたし。しかるを、基俊と云者、此道稽古ありて、俊頼に時々あらそふおあり。しかれば、今の世まで、二の流たりといへども、そのこつ、俊頼におよぶべからず。天下にかたをならぶるものなくて、俊頼数年をへたり。世間「(三三才) にも歌の道むげにすたれて、此道なきがごとし。法性寺入道此道このみ、崇徳院のすゑつかたより、やう／＼又歌の事さたありて、久安に百首歌などありしより、俊頼、清輔、西行法師など云もの、此道にたへたるが、今又ひろまれる也。凡中比よりこのかたは、此道にえたる人もすくなし。たゞ経信、近くは西行が跡をまなぶべし。其様は別の事にあらず。たゞ詞をかざらずして、ふつ／＼といひたるがよき也。但、紫式部は此道の堪能にていひ出たるやうを、いまの世の人あしざまにとりなして、一定平懐に「(三三ウ) かたはらいたき事ありぬべし。俊頼、俊成はいづれにも渡りて侍れば、其様をまなび侍らんこそいたく題そるまじくは侍れば、誰かは是をまなばざる。しかあれど、天性むげにおとりぬれば、心にはそれが様と思へども、其様似る所なし。此道をこのまば、まづがいしうをさきとして、道をもくすべし。しかるを、近年の人々は大かたさもみえず、物に心えたるよしにて、我みちの名をばしらざるなり。能因法師が、伊勢のこが家

の松をみて、車よりおりけむまでこそなく共、近年は故人をばやもすればきやう「(三四才) まむせんとす。素性法師は歌にしゆをこめて、たび／＼人の夢にいり、長能は歌のなんををひて、思じに／＼しにけりなどいへり。或は命にかへて一首秀逸をえたる事もあり。よく／＼此道には心をふかくすべき也。古人は此道には心をとゞめたる事一定也。先年、古今の歌のことに心にしむをかきつがふ事ありき。左右をば何となくつがひたりしを、小町夢にみえて云、我と伊勢とはならびたる女歌よみにて侍しを、此御歌合、みな伊勢は左に、われは右につがはれて侍事、「(三四ウ) ふかきうれへ也、と云。夢さめて、おどろきてかの巻物をひらきみるに、つがひごとに、伊勢は左、小町は右也けり。左右とさだめざりし事なれば、何となくつがひたるに、自然にかくかける事、今是をみるに、且はおそれ、且は随喜す。さればこれほどの事にも、心を留て照しみけむ事、恐あるによりて、かの巻物すなはち火中に入。凡昔夢に小町が手より金を百両うるといふ事をみたりしより、天性歌の様などにいみじきうへ、小町をばふかく信仰す。今又かゝり。勝「(三五才) 事とすべし。何事をかくせず、誰にとぶらふ事なき人も、天性えたる歌よみは、先生の事なれど、学せざる輩、猶判者にはたのみがたし。能々学すべき事也。稽古といふに、天竺、震旦の事をみるにもあらず、たゞふるき歌の心を能々みるべし。才学と云に、万葉集、古今より外はいづる事なし。歌の体をしらむ事、代々集中にあり。たゞ心にしづかにして、能々詠吟せよ。おなじ風情、同詞をよみながら、善悪けんかく也。又歌にも作者のほどはみゆる也。いにしへの冬「(三五ウ) 嗣、融、中比も、法性寺歌などは、あらはにほしよげに、だびたる所

もなし。我述懐をする程に、あまりにわびしさのすぎたる、返々みぐるし。

師光入道が歌は、皆かなしげなる事より外によまず。それもいたくすぎぬるは、なか／＼なる事也。数ならぬ、などいふ事は、西行やうに、世をそむきて数ならずといふはよし。世にあるもあまりにわびしげなるが、数ならぬとよめるは、いたく数ならぬなり。すこし人がましき人の、前のつかさなどにてよみたるはよし。時ならぬ、などいへるも同事也。此等はせん」

(三六才) ずるところ、くるしからぬ事なれど、せめての事を云也。近比四十などにも余ぬれば、老が世の、老楽の、などのみよみあへる、なか／＼かたはらいたき事也。ふり行、などは、さもありなん、老が世、などは、いかさまにも五十にあまりてのうへの事也。むかし今ことなる事なれど、業平が、老楽のこむと云なる、とよめる、猶五十以後の事也。まして四十あまりなどを老楽と云事、尤ゆへなし。幼少時、心き、歌よむものも、おとなしくなるまで次第にまさる事も」(三六ウ) なし。後撰の八子が歌めでたけれども、其始終しらず。しめゆふといひしものは、むげにおさなく、梅の花ちらばとくちれおしからず枝だにあらば又もさきなん、と読たりける、こわらは⁽⁵¹⁾べが口にある歌也。げにも風情能よめり。しかれ共、六十にあまりしかど、さほどの歌其後よまず。されば、かならずおさなくより学するによらざる也。家隆卿がおさなくて、十月に十は⁽⁵²⁾ふらぬぞ、とよみたりけるこそ山口しるくめでたけれ。されば、何にもよらぬ事也。又、文字のたらぬよみならへる事あり。」(三七才) それもやうによるべし。袖にうつらぬおりしなれば、岩もる水の色しみえねば、などいふなるを、水しまされる、など聞にくし。一切の詞、是におなじ。手な、ふれそも、

いとよからず。ことなしぶとも、をとなしぶとも、などいへるは、やうありげにてよし。祝言一首などには、人ごとに祝をよむならひ也。但、秀逸

などならば、かならず又、松の千とせ、好べからず。経信卿が延久の住吉詣の、寛治の月宴に⁽⁵⁴⁾皆祝言をよまず。松のしづえをあらふ白なみ、といひ、玉ゐる数をいかで知まし、とよめる」(三七ウ) 皆是われながら秀逸と思へるゆへ也。此例にてゑせ歌の祝言ならざらんよむべからず。抑歌の名譽の事、返々恐るべし。文体ふた、びうつるといへる、尤歌にもしかり。

昔の風吟の風あきらかなるうへ、人の心かはりやすく、時うつり、代あらたまるまゝに、末代の人、心のまゝに善悪をさだむ。管絃、音曲の道などは、昔一物といへるうへは、今の人難するにあたはず。歌を⁽⁵⁵⁾きては、今の世人、心をわかつて⁽⁵⁶⁾ほめらる。浅心をもて深心をそしる、尤恐べき事也。

公任卿は寛和の比」(三八才) より、天下無双の歌人にて、⁽⁵⁷⁾すくに二百歳を経たり。在世の時いふにおよばず、経信、俊頼已下、ちかくも俊成が存生までは、空の月日のごとくあふぎし。近比より、公任むげ也と云事いできて、あさく思へる輩少あり。是此卅余年の事也。さ程のものをば、すこし心にあはず共さてこそあるべきに、一向に捨る、もての外的事也。貫之もさしもなしなど云事少々聞ゆ。歌の魔第一也。げにも公任卿が歌、名譽ほどはおぼえず、すこしいかにやらんあれ共、さすがに歌のさまよくこそ」(三八ウ) みえ侍れ。たゞわがこのむすぢならぬと難するか。是ならず、昔名譽ある人の、今の世にかなはず、昔さしもなき歌人の近代の風にあへるおほし。すべて歌に好々おほし。たけたかき様を好人もあり、秀句を好人もあり、又ひたやさしを好人もあり。是みな理にかなはず。たけた

かきばかりにて心すくなく、秀句ばかりにて幽玄をわすれ、やさしきばかりにてなき事おほし。たゞせむずるところ、奥義肝心すぐに歌をよめと教るをせむとする所也。努々他の様をこのむべからず。」(三九才)

内閣文庫本との異同

- 1 何事—これは何事
- 2 心は—心には
- 3 おほせ—いひおほせ
- 4 管絃を—人管絃を
- 5 深—ふかき
- 6 詞—詞も
- 7 そへごとす—そへごとをことす
- 8 きり—きる
- 9 やう—たう
- 10 をとて—を見て
- 11 みゝなれず—みゝなれ
- 12 一句—一向
- 13 さのみに—さのみ耳に
- 14 なれば—なれと
- 15 あまりに—あま耳
- 16 聞ね—きえね

- 17 ふるき—ふかき
- 18 歌にも—よき歌にも
- 19 など—なにと
- 20 べき—べきに
- 21 もなければ、よしとも聞えず。めでたきふし—ナシ
- 22 よる—はる
- 23 ひく—ひらく
- 24 首—是
- 25 り—る
- 26 見る—見ゆる
- 27 事也—事なし
- 28 なれば—なれと
- 29 あひす—あんす
- 30 せむに—せむにせん
- 31 何事も—何事よ
- 32 有明—有明の月
- 33 なにかは—なちかは□□かは
- 34 いへる—いつる
- 35 劫—功
- 36 也—事也
- 37 在納言—サイ(サイ)補入)納言
- 38 小野—小町

- 39 為方万長—為方々長
40 さかい—境
41 口きかぬ—口のきかぬなり
42 跡—所
43 きゝ—きし
44 紫式部—紫
45 こめて—とめて
46 われ—これ
47 などに—ことに
48 は—ナシ
49 あるも—あるものゝ
50 おさなくて—おとさなくて
51 こわらはべ—こわらへ
52 十月—なと十月
53 たらぬ—たらぬに
54 に—には
55 歌を—歌に
56 ほめらる—ほめそしる
57 すくに—すく